

2011年

春の課題作文優秀作品【小学部】

H・Nさん（長津田第二小）

私は前野良沢の立場に立った生き方をしたいです。

前野良沢の息子が言うように、「解体新書」は杉田玄白と二人で書いた本ですし、前野良沢もこの本を書くことにすぐ努力したのだからお金持ちになる権利があったと思います。しかしお金がなく、生活は苦しくても好きなことをやるということが、一番の幸せだと思います。杉田玄白は、本を出版した後自分に有名になりお金持ちになれたときは、とても嬉しかったと思います。しかし心の底からは嬉しくなかったのだと思います。なぜなら「解体新書」は前野良沢と二人で書いたものだからです。お金はあっても引け目を感じていたら、いつまでたっても、とてもいい気持ちでは暮らせないとおもいました。

また、私はこのような経験をしたことがあります。私が杉田玄白のような立場にたつたときの経験です。私が幼稚園生の頃、弟と二人でブロックを使いむずかしいものを作りました。そしてお母さんに私一人で作ったと見せに行き、とてもほめられました。そのときはとても嬉しかったのですが、弟と一緒に作ったのだと思うと引け目を感じてしまいました。

このような経験から、完全な本を作ったり、自分で好きな仕事をやって満足したりする前野良沢のような生き方をした方が幸せにくらいしていいかなと思います。

S・Nさん（北山田小）

わたしは文章を読み、前野良沢のような人生を送りたいと思いました。

努力に努力を積み重ねてやっとできた本「解体新書」。でも、まだところどころ

ろに間違いがあるのに出版したくない。その前野良沢の気持ちがありました。たとえば、ところどころ赤ペンで直されているのに出せ、と言われているのに少し似ていたからです。自分の名前を出したくないのもわかった気がします。「解体新書」を書き、世間で大評判になるのもいいなと思ったけれど、気持ちは変わりませんでした。

わたしはそんなことを知った前野良沢の息子の気持ちもわかりました。二人で書いたはずなのに、なんで杉田玄白だけがお金持ちなの。わたしがもしも同じ立場だったらきっと似たことを言うと思います。でも、前野良沢の立場だったら、その気持ちになるかもしれません。

わたしは将来漫画家になりたいと思っています。もし、なつたとしたらおもしろくないマンガは出したくない。みんなが楽しく読めるマンガを描きたいと思うし、名前だつて出したくないと少し似たことを言うかもしれません。

わたしは前野良沢のような人生を送りたいと思ったのは二つの理由があります。一つ目は心がモヤモヤした人生を送りたくないのと、二つ目は貧しい生活だつたとしても、好きなことやっていたらよい、と同じことを思ったからです。

一八〇三年、前野良沢は息を引き取つたけれど、そのときの気持ちはとてもきれいでスッキリしていて幸せに満ちていたんだろう。きっと天国で好きなことをやって、本を作って、有名になつているのだろうかと、幸せそうな顔が見えました。わたしは、どんな困難が待ち受けていようと、夢をあきらめたくない、と思いました。

H・Nさん（荏田南小）

私は「前野良沢」の生き方が好きだ。

不完全な「解体新書」が出版されてから、二人の間で貧富の差が生じてしまった。「前野良沢」は、裕福になりたいという本音と翻訳家としてのプライドを守りたいという気持ちで複雑な思いをしていたのだろう。でも「前野良沢」は

自分の名をのせなかった。私だったら、のせる方を選んでしまうかもしれない。なぜなら、私は「前野良沢」のように守らなくてはならないプライドのようなものは、まだ何もない。そして、せっかくのチャンスがきたのに貧しい暮らしをするのはもったいないと思うからだ。でも、「前野良沢」は、自分の翻訳家としてのプライドを守りぬき、貧しくても強く生きてきたのだと思った。

一方、「杉田玄白」は、医学を進歩させたいという気持ちが強くあったから、たとえ不完全なものであったとしても世の中の人に早くこの本を読んでもらいたかったのだろう。結果、自分だけがお金持ちになった。「前野良沢さんが頑固だからこうなったんだ。私は何も悪くない……」この言葉はきつと「前野良沢」に対して自分だけが豊かになって申し訳ないと思う気持ちがかくされているように感じた。そして「杉田玄白」もまた自分が選んだ道は正しかった、というプライドを守りぬき生きてきたのだろう。

二人の共通点は、どちらも仕事に対してのプライドや使命を最後まで守りぬこうと強く生きたことだ。二人の立場のちがいはあるけれども、二人とも後悔している気持ちはどこにもない。それぞれが正しい道を選んだ。ただ私自身感じたことは、「杉田玄白」の生き方は、どことなく冷たく、「前野良沢」の生き方は暖かく感じた。

だから私は「前野良沢」の生き方が好きだ。

T・Hくん（長津田第二小）

僕は、杉田玄白か前野良沢どちらの生き方をしたいかと聞かれたら、杉田玄白と答えると思います。

理由は、不完全な医学書だとしても、少しでも早く出版することで救える命もあると思うからです。

前野良沢のように自分自身の「理想」を追うのもいいけれど、それよりも人の「命」の方が大切だと思ったことも理由の一つです。

また、前野良沢の頑固な考えも時には必要だと思います。しかし、自分の財

産や家族のことなど含めて柔軟に考えることの方が必要じゃないかと思います。もし、僕が前野良沢の立場だったら、自ら名前を載せずに家族にづらい思いをさせながら自分だけ満足することなんてできません。

前野良沢の生き方は、人にとって理想的な生き方ではないかと思います。しかし、理想だけでは生きていけません。現実と向き合い現実を考え、多少自分の考えを曲げることも生きていく上で必要なことではないのだろうかと思いません。それに、自分の理想を貫き自分一人だけ幸せに暮らす前野良沢の生き方よりも、自分の理想を少し曲げても、一人でも多くの人が幸せに暮らせるよう行動した杉田玄白のような生き方をしたいと思います。

2011年

春の課題作文優秀作品【中学部】

M・Yさん（茅ヶ崎中）

前野良沢の考え方、生き方を私は評価する。

この頃の時代は、漢方医学がさかんであつただろうし、人体の詳しい構造が描かれている西洋医学書を読み解くことはとても画期的なことだつたと思う。玄白の医学知識と良沢の翻訳の力で協力しあつても、この作業はとても大変であつたと想像できる。一応の出来上がりを迎えた解体新書は完全に正確とはいえないものであつた。しかし、出来栄えよりも、この知識をいち早く世の中に発表したいと考えた玄白の心の中には、医学を進歩させることを目指すと共に、自分の名を売りたいという気持ちも強かつたのであろう。思つたとおりに玄白の功績は人々に認められ、大医家として生涯有名になりお金持ちになつた。この行動から玄白は現実的で合理的な人だと思ふ。逆に良沢は自尊心が高く、完全主義者であると思ふ。納得のいかない不完全な解体新書を自分の名前で発表することにプライドが許さなかつたのだろう。

例えば、間違つた訳のせいで誤診をして死んでしまう人がいるかもしれない。そう考えると良沢のこだわりは重大であり、人の命を仕事にする以上間違いがあつてはならない。より分かりやすく、より正確にと何年にもわたり翻訳に人生をささげた良沢は立派だと思ふ。翻訳に対して二人の決断は違つていたが、二人とも現代医学の先駆けになつた人物に違いない。

未知の世界に足を踏み入れ、生涯を翻訳にささげた良沢の精神は素晴らしく、名を上げることもなく貧しい暮らしであつたが、充実した生き方だと思ふ。私も自分の仕事にプライドを持って、信じる道を歩めたら良いなと思ふ。

M・Yくん（あかね台中）

僕は、どちらの生き方も好きではないが、どちらかというところ、前野良沢の生き方がいい。

玄白は日本の医学の進歩を望む一方で、欲もあつた。良沢にも翻訳家としてのプライドと、やはり欲があつたのだろう。二人とも人間なのだから欲があるのは当然のことだ。しかし、玄白は自分に甘く、良沢は自分に厳しい性格だつたのではないだろうか。だからこそ二人の関係が悪化してしまつたのではないかと思ふ。

ここまでだと、良沢の方が偉いと思ふ。ただ、良沢は間違いを起こしたのだ。それは、著者のところに自分の名前を記さなかつた事だ。

もう過去のことだから分らないが、もしそこで記していたら、玄白と同じ位大金持ちになつていたかもしれない。そうすればもっと書物などを買いさらに知識を増やすことができたかもしれない。僕はそう思う。

しかし玄白も少し意地がわるい。本文にもあつたが、玄白は自分だけが金持ちになつて良沢は貧しい生活を送つてゐる事が引かかつていたのだから、少しは金を分け与えた方が良かったのではないか。良沢が受け取るかはまた別だが。

僕は半端じゃない程欲深く、半端じゃない程自分に甘く、半端じゃない程ズル賢い。僕の今の性格は玄白にかなり似てゐる。この性格で生きていくのなら、道は成功か失敗の二つしかないと思ふ。それにもし成功しても、玄白の様に後悔することがあるかもしれない。しかし良沢のように、自分に厳しく、欲を制御して、自分の行動一つ一つに誇りを持つていたら、道は「成功」という一つのみになるだろう。先に僕は良沢が間違いを起こしたと書いたが、良沢にとつては間違いではなかつたのかもしれない。僕は良沢の様に、人にどう言われようと自分の行動一つ一つに誇りを持って、後悔のない人生を送りたい。

N・Hくん（十日市場中）

私は、杉田玄白の意見に賛成だ。確かに前野良沢の意見も悪い物ではないと思う。だが、一つの例で考えてみると見え方が変わってこないだろうか。

例えば学校への提出物で考えてみる。ノートの締切日が今日だとする。しかし、まだ八十パーセントしか書いていない。その時どうするのがよいだろうか。未完成で提出するのか、一日遅れで完璧なものを提出するか。私なら、間違いなくその日に提出する。

以前学校の先生がこう言っていた。「少し抜けていて書いていないところがあっても提出日に遅れるよりは全然良い」と。これが一つ目の理由である。また、私の学校では提出日から一日遅れると評価の点数が半分になるという規則もある。提出日に出した評価が八十点だったとしたら、翌日にいくら完璧なものを提出し百点を取ったとしても、評価は半分の五十点になってしまう。そう考えると、杉田玄白の考えの方が高い評価を得るように思えてくる。

また、息子がいるという点からも前野良沢の考え方には賛成できない。息子がいるにも関わらず、自分の信念を貫き貧しい生活を送らせてしまった。自分の考え方を曲げないことが大切だと考える人もいるだろう。その考えが間違っているとは思わない。しかし、前野良沢は、信念を貫き通すことで息子が貧しい暮らしをしなければならぬことまで想像していたように感じない。時には、自分の思いを曲げ、他人のことを優先することも大切な事だと私は思う。

A・Mさん（川和中）

この文章における杉田玄白は、日本の医学を早く進歩させたいと願うあまり、解体新書の翻訳作業の遅れに焦りを感じ、前野と決別した結果、自分だけが富と栄光を手に入れたことに複雑な心情を抱えることになる。一方、前野良沢は翻訳家としての理想を求め、杉田と決別して翻訳の途中であった解体新書を手放したため、相変わらず貧しい生活を送ることになるが、翻訳家としての仕事

を出来ることに満足していた。

この二人の違いは、解体新書に「早く世に広めること」を求めたか、「より完璧な翻訳」を求めたかである。杉田は医者として医学の進歩を使命とし、前野は翻訳家として完璧な本を作ることを使命とした。ここで、富と栄光を得ようとする野心家であったか否かは不確定であるため、取り上げるべきではないと思う。二人は自分の判断と責任で、杉田は「不完全な解体新書」を出版し、前野は解体新書から手を引いた。

ここまでを踏まえて、この二人のどちらか一方の行き方を選ぶとすれば、私は杉田玄白を選ぶ。本の内容をより完全なものにすることはもちろん大切なことであるし、それを使命とする前野の生き方は素直に格好良いと思う。しかし、当時の日本において、医学知識の普及と医学の進歩はそれ以上に重要であったと思う。杉田は解体新書を含め、日本の医学の進歩に貢献し続けた。その対価として、富と名誉を手に入れたのだから、自らの意地と判断でそれを手放し、家族にまで貧しい生活を送らせることになった前野とは比べるまでもない。とはいえ、私は杉田が正しかったとは思わない。私なら、前野と決別せず本を二回に分けて出版する。いわゆる「改訂版」として、最初に出した解体新書を二人でより完全なものにして出版するのだ。これが唯一の妥協策だったのでないかと思う。杉田は前野に引け目を感じることなく、また前野も裕福な生活を手に入れられたのではないだろうか。

I・Mさん（中川西中）

私は、前野良沢の生き方が素晴らしいと思いました。

理由は、有名になりたいとか、大金持ちになりたいとは思わないで、翻訳家としての理想を追求しているからです。私も将来、自分の好きなことを仕事にすることができたら、他の人にまどわされずに、自分が思うその仕事の理想を探し、追求していけたらいいと思います。

また、前野良沢が息子に言った言葉も印象に残っています。なぜなら、息子

がお父さんに有名になって欲しいと強く願っていることを知っても、自分の意思をきちんと伝えているところが、翻訳家としてだけでなく、父親としても素晴らしいと思いました。

もう一つの理由として、私も前野良沢と同じように、完璧な本を作ることが大切だと思うからです。もし、不完全な本を出版して間違いが世の中に広まってしまったら、大変なことになってしまいます。それに、一度間違ったことが広まってしまうと、世間の人が「解体新書」を信用することができなくなってしまう。 「解体新書」が信用されなくなると、作者の杉田玄白も前野良沢も信用されなくなってしまうかもしれない。不完全な本を出版すると、こんなことが起こってしまうかもしれないので、最初から完璧で間違いのない本を出版した方が良いと思います。

私も前野良沢のような生き方ができる人になりたいと思いました。